

NTT東日本札幌、スマートベッドシステム道内初導入

中央区のNTT東日本札幌病院（吉岡成人院長・301床）は、道内で初めて、ICTを活用した医療情報統合システム「スマートベッドシステム」を導入した。離在床状態、睡眠・覚醒、心拍数などのベッドサイド情報を集約、スタッフステーションの端末画面でも、リアルタイムに患者見守りができるのがメリット。オリジナルのピクトグラムもデザインするなど、自院で使いやすいように工夫、スタッフ間の情報共有、ケアに集中できる時間も着実に増加した。同病院では3カ年かけて全病床を同システムに切り替える予定だ。

同病院のインシデントレベル3以上では、高齢者が多く、認知症や術後・検査後のせん妄状態を併発しているケースも目立つことから、頻回な見守りや安全確認が必要なため、特に夜間帯で多くの業務時間が取られていることなどが課題となっていた。

そこで看護部では22年夏ごろから業務委員会や記録委員会などで、これまでの事故事例等のデータ検証を基に検討、昨年12月～1月までトライアル実証を行って導入を決めた。

まずは2月にケア介助や転倒患者などが多い整形外科病棟の36床を、スマートベッドシステムに切り替え。ベッドサイド端末によって、電子カルテ情報をはじめ、睡眠・覚醒、呼吸数、心拍数などが画面上で確認、患者の状態変化を通知してくれる上、スタッフステーションの端末でもタイムリーに見ることができる。患者の介助方法、ADL、安静度、アレルギーや嚥下障害の有無、センサー、負荷、酸素、麻痺の状態、オムツプラン、ベッドの背上げ角度や高さ、臨床センターなどがピクトグラムや一覧で表示され、患者状態のスタッフ間共有が高まり、各種情報のデータ化や活用も可能になるという。